

汲古一紙

「こんな教育もあった」(一)

中村素堂

大東亜戦争終戦のころ、家族全員を宮城県山の形寄りの地に疎開させ、自分はひとり東京で働き、浦和に間借りをして自炊生活を送っていた。

その時、間貸しをして下さった家は、国鉄の機械工学のオーソリテイ羽島金三郎邸で、奥の客間が私の部屋であった。

この羽島翁はその時分はもう引退して、やがて八十代へ入るといふ隠居の身であったが、研究心の旺盛な人で、ねじひとつでも違つたものや実用不向きとあれば、私のものでも早速持つていって、すつかり改造して下さつて、「こういふふうだから日本が敗けたりするんだ」とおっしゃっていた。

ある日この翁が私の部屋に入つて来て「折入つて、頼みたいことがある……」とのこと。用件というのは、翁のご郷里山形県上市の月岡城址に、この地の明治維新時に長州の吉田松陰のような存在であった儒者金子得処先生の彰徳碑というのが建つていたが、碑全部が銅製であつたために、今度の戦争で、軍用資材として供出してしまつた。いまその旧趾には巨石を組んだ台座と鉄柵だけが残つている。碑を喪つた台座は見るからに戦時の惨状を想起させるので、往年と同じような鑄銅製四角錐状の巨碑を再建することになつた。前の碑は漢文で、たしか隸書であつたが、今度は楷書で書きたい。しかし西川春洞先生はもう故人であるが、君は幸いその孫弟子であるから引き受けて書いてくれないか——ということであつた。

浅からぬ翰墨の縁に感激して、荷の重いのをかえりみず書くことにした。不思議な縁ではあるが、この時分私は東京都内の石神井に家を建てつつあつた。さて転居してみると意外、近隣七、八軒はみ

な山形県上山出身の人ばかり。「どちらから越して来たか……」と訊かれ、「浦和市の羽島邸の間借り人でした」の答えに、私をヤツパリ同郷上山の人と決めてしまつて、何となく温くつきあつてくれる。羽島翁は東大を出ると、藩主松平子爵のお嬢さんを夫人に迎へ、出世の一端をたどつた人だから、一郷羨望の的だつた。その家に下宿していた人とあればこんなことになるかとうなずかれるけれど、またどうしてこの一郭がみな上山の人なのかは私の方の問いであつた。

温泉郷上山市の大旅館の一族が土地会社を経営していて、この一郭を分譲する時、同郷の人達を優先したためと判り、また高校、大も同期の文学士などが私の家と堀ひとえの裏隣りという次第なのである。

明治初期の小学校から同じ道を歩んできた元東大教授の佐野利器博士が会長格で、金子得処先生碑はぜひ再建しようと話が決まつた時、隣人小松武治先生が文を撰することになつていて、羽島翁も私宅に泊まつて協議するという状況になつてきた。

翌年の夏にこの碑は完成して、盛大な除幕式が行われた。

羽島翁はもうとつとくに先発して郷里の家に待機、隣の小松先生はお子様付き添いで途中一泊して出向かれるという。私は学校の都合で当日の朝着の列車で参列した。駅にいて参列者を見張っていた朝日新聞の記者はちよつと私の知人であつたために早速、多くの名士の協賛があつてこの碑は出来たものだろうが、実行の中心が明治十三年ごろ生まれの上山の人なのはどういうわけでしょう——と訊かれたので、しぜん私もまた、式場で羽島翁に同様の質問をする次第となつた。(つづく)

『筆間雑記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〈「書範」昭和五十七年〉